

【出土遺物】

棺内から現段階では副葬品も含め出土品は確認していません。しかし、粘土槨直上において滑石製と思われる勾玉が一点出土しているほか、墳丘盛土からは円筒埴輪片が見つかっており、その特徴から古墳時代前中期～中期初頭（4世紀後葉）と推測されます。



写真5 円筒埴輪出土状



写真6 勾玉出土状況

【狐塚古墳の築造背景】

古墳時代前期は湖南地域において有力な首長が出現し、大和政権との連携を深めた時期です。草津市山寺町においても丘陵上に北谷11号墳が築造されました。この古墳は前方後円墳と推測され、腕輪形石製品をはじめとした副葬品が多く出土していることから、大和政権との関連がうかがえる当時の首長が被葬者であると考えられています。

時代が降ると、丘陵上に築かれた北谷古墳群の他に湖成段丘上において古墳群が展開されるようになります。草津市追分町に所在する追分古墳も湖成段丘上の先端部近くに築造されます。狐塚古墳は追分古墳と同じ段丘上の北西側に所在し、古墳を築造した勢力が丘陵の開発とともに西へと展開していった過程がうかがえます。また、古墳時代前期の集落は確認されていませんが、古墳時代後期になると矢倉古墳群の北側において中畠遺跡、谷遺跡といった大規模な集落が築かれます。

このような集落が築かれる前段階において、先進的な開発を進めた中心的な地域のリーダーが狐塚古墳の被葬者と考えられます。さらに古墳時代中期後半になると、草津市南笠町において南笠古墳群が築造されることから、付近を流れる狼川や十禅寺川によって形成された沖積地が開発され、この地域を本拠地とする有力首長が大きく成長したことを示しています。

【まとめ】

草津市において北谷1号墳・北谷11号墳、追分古墳が古墳時代前期における古墳として存在が認知されていましたが、その他の事例は確認できていませんでした。しかし、今回の狐塚古墳発掘調査では、粘土槨の構造や出土遺物から古墳時代前期末～中期初頭（4世紀後葉）の古墳であることが判明し、市域の当該期における首長勢力の発展過程を紐解く一端となりました。

また、棺内は盜掘を受けずに埋葬施設である粘土槨が良好な状態であることや、墳丘盛土や粘土槨に対して豊富に粘土を使用しているといった地域的な特色も確認できることから、良好な粘土槨の事例の一つとしてとらえられます。



写真7 狐塚古墳と周囲の風景（西から）



やぐらこふんぐん きつねづかこふん 矢倉古墳群(狐塚古墳) 発掘調査成果説明会資料

草津市教育委員會 歴史文化財課

【調査概要】

調査期間：令和7年9月～令和8年1月末頃

調査地点：草津市野路町

調查面積：214 m²

調査原因：露天駐車場造成工事に伴う発掘調査

【主な調査成果】

- ◎ 古墳の埋葬施設である**粘土櫛**を発見しました～市内では65年ぶり～
 - ◎ 粘土櫛内において、木棺が設置されていた場所に**赤色顔料**が塗られています
 - ◎ 木棺は「**箱形の組合式木棺**」と推定されます
 - ◎ 墳丘盛土中から円筒埴輪片、粘土櫛直上から滑石製の勾玉が出土しました
 - ⇒ 粘土櫛の構造、出土品から**古墳時代前期末～中期初頭（4世紀後葉）**の古墳と考えられます

【遺跡の概要とこれまでの調査】

矢倉古墳群は草津市西矢倉・野路町に所在しており、瀬田丘陵の先端部付近に位置しています。近接する神社境内に古墳が残っていることや、周辺に古墳状の高まりが残っていることから、古墳群として周知されてきました。今回調査したのは野路町にある通称「狐塚古墳」と呼ばれる古墳です。

これまでの調査では、墳丘の周囲を取り巻くように、周濠と推測される落込みが存在し、その埋土中から円筒埴輪片が僅かに出土しています。平成28年度の確認調査では墳丘上を調査し、粘土槻の一部と思われる白色粘土層の堆積を確認しています。



図1 矢倉古墳群と関連する周辺の遺跡

【検出された粘土櫛について】

狐塚古墳の粘土櫛は南北長約5.3m、東西幅2.5mの規模を持ちます。棺床の形状から判断すると安置された木棺は「箱形の組合式木棺」と推定されます。「割竹形木棺」を安置する粘土櫛では大きく「棺床粘土」と「被覆粘土」との二工程に分けられますが、狐塚古墳の粘土櫛は木棺を設置する床面となる「棺床粘土」、木棺の側板をおさえるための「棺側粘土」、木棺を蓋う

「被覆粘土」の三工程に分けられます。

「箱形の組合式木棺」と推定する根拠としては、①赤色顔料の面（棺底面）が平らであること、②棺内側の棺側粘土がほぼ直立することが挙げられます。規模としては幅約80cm、高さ約60cm、長さは約4mと推定されます。また、粘土櫛の床面が傾斜しており、北側が高くなっていることから被葬者の頭位方向は北側を向いていたと考えられます。その他の箱形の組合式木棺を持つ粘土櫛の事例としては真名井古墳（大阪府）、東大寺山古墳（奈良県）や石山古墳（三重県）が挙げられます。



写真1 粘土櫛断面
南から(図7 A-A')



写真2 粘土櫛断面
南から(図7 A-A')



赤色顔料は棺底面に幅約30~40cmで南北に約4m広がっています。北側においては、チョークの粉のような質感の鮮明な赤色が広がっていますが、南側においてはくすんだ赤茶色となっており、頭位方向である北側にのみ水銀朱を使用し、その他においてはベンガラを塗る、といった使い分けがされていたと考えられます。

粘土櫛とは？

木棺を粘土で包み、保護する埋葬施設です。古墳時代前期後半～中期（4世紀前半～5世紀中頃）にかけて出現します。

木棺の種類

古墳時代前期においては①丸太を使用して二つに割り、両者それぞれに内側をくりぬき、棺蓋と棺身にした「割竹形木棺」、②板材を箱形に組み合わせた「箱形の組合式木棺」が普及していました。

【粘土櫛構築方法の復元】

一般的に粘土櫛を含む堅穴系の埋葬施設は墳丘を盛り上げた上から墓坑を掘り込み、その中に設置されます（図4）。しかし、狐塚古墳においては墳丘の構築と並行して粘土櫛を設置したと考えられます。これは墳丘を盛る途中の段階で一度平坦面を作り、その面において浅い掘り込み、もしくは土壘を築いたうえで粘土櫛を設置する、といった構築方法です（図5）。

また、狐塚古墳における特徴の一つとして、灰白色粘土ブロックを含む墳丘盛土が挙げられます。この粘土ブロックは粘土櫛と同様のものと考えられ、精良な粘土が使用されています。粘土ブロックが混じる盛土堆積は一般的ではなく、通常は粘質土と砂質土が交互に堆積する状況がみられます。

このような灰白色粘土は非常に精良で、粘土櫛にも重厚的に使用されています。古墳を築造する上で当時は古墳周辺において粘土が採取しやすい場所であったことがうかがえます。

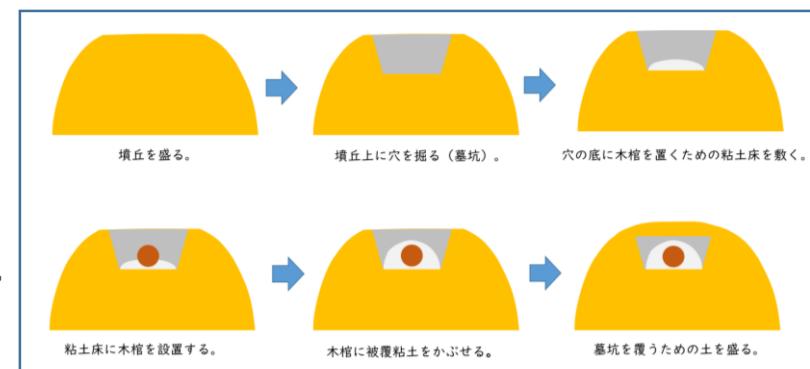


図4 一般的な粘土櫛構築過程

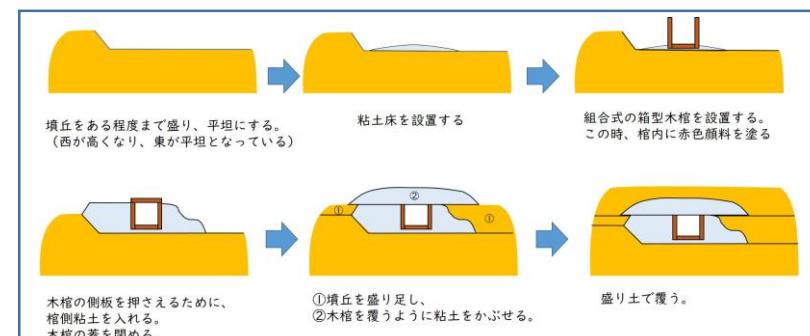


図5 狐塚古墳における粘土櫛構築過程

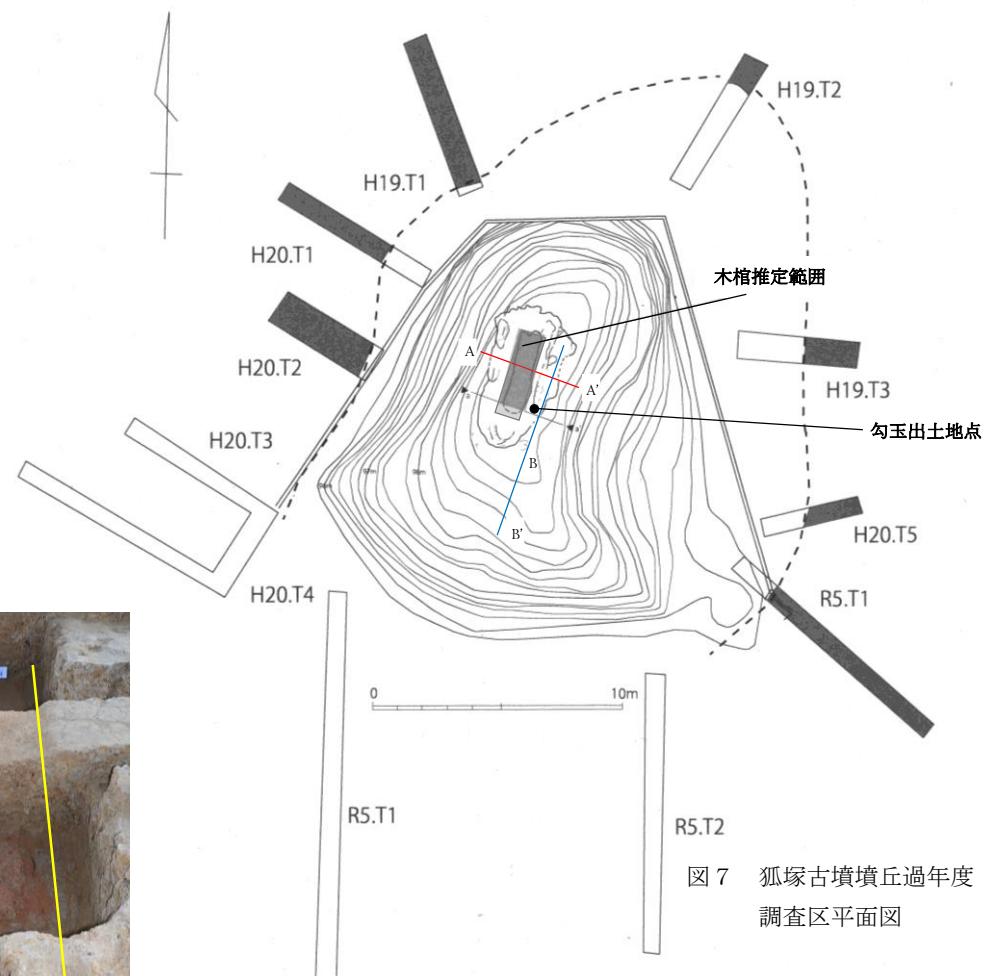
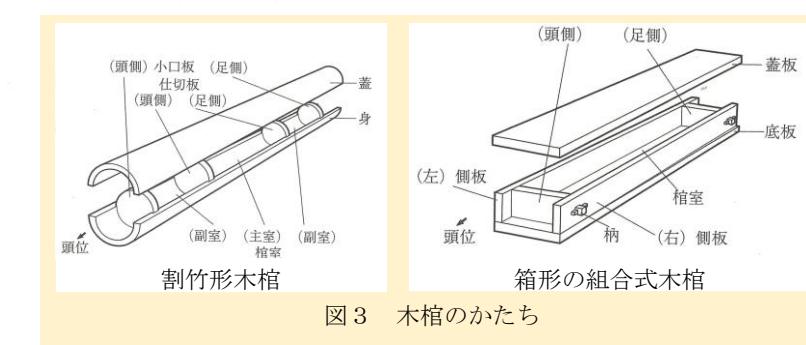


写真4 墳丘盛土断面 東から (図6 B'-B')

【墳丘規模】

周辺が古墳を円形に取り囲む地割になっており、主体部である粘土櫛を中心に据えると周濠も含め、直径50~60m程度の円墳を復元することができます。しかし、あくまで地形からの想定に過ぎないため、今後の調査における墳丘の堆積・墳丘裾の確認や、過去の試掘調査において検出した周濠の落込みと推定されるラインも含めて慎重に検討する必要があります。



出典：「古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀」 2011

